

関連する
SDGsVALUE CREATION
STORY

日々のコミュニケーションから新たな価値提供を生み出す 安心・安全な製品納入と 誰もが輝ける職場づくりに挑む

明電舎の製品が納入される現地で、お客様へ引き渡しをするまでの最終工程を担うプラント建設部門。人手不足に悩む工事の業界において、女性が力を発揮しやすい職場づくりや新たなツールを用いた業務効率の改善などを推し進めつつ、アンカーとしてのバトンを手に駆け続ける人たちのストーリー。



明電舎 プラント建設本部 工事管理第二部
東日本工事事務部 関東工事第一課

佐藤 夏海

2019年からプラント建設本部初の女性現場代理人として、下水処理施設にかかわる工事の施工管理に携わる。

- 現場コミュニケーションはスムーズな施工に欠かせない他、情報収集としても重要。(右は守谷商会 村岡さん)
- NAS電池と電力変換装置を組み合わせた電力貯蔵システム。蓄えた夜間電力を昼間に放電し省エネを実現



風通しの良さと コミュニケーション 信頼関係の構築が当社の 価値を高める

東京都北区の大部分と板橋・豊島・足立区の一部の下水を処理する、東京都下水道局 みやぎ水再生センター。東京ドーム360個分に相当する処理区域を受け持つ施設の一部で、電気設備の更新に向けた各種工事が進行しています。現場代理人としてタクトを振るう一人は、明電舎プラント建設本部の佐藤夏海さん。2017年に入社し、東京都下水道局発注の工事に携わってき

た26歳のホープは、複数の業者間での工程調整や図面の作成、予算管理、安全管理などに奔走します。持ち前の明るさで、お客様やベテランぞろいの協力会社の関係者からは、親しみを込めた愛称で呼ばれることもしばしば。「何かあった時にすぐに相談できる存在」とは、協力会社を取りまとめる株式会社守谷商会 村岡功太郎さんの評です。
佐藤▶「現場で協力する皆さんとは、仕事の場面だけでなく、休憩時もコミュニケーションを取るなど風通しの良さを心掛けている。無事故・無災害を最優先に、チーム一丸で取り組む。」

2026年3月の担当案件の引き渡しに向け、より良い現場づくりに余念がありません。
現場で設備を稼働させるための現地工程の計画から施工、引き渡しまでを管理・統括する明電舎のプラント建設本部。前身の工事事務部が戦後間もない1945年10月に設立されて以来、上下水道や電力、放送、鉄道など、日本中の社会インフラ整備の一翼を担ってきました。国内において、年間200ほどのプロジェクトが並行して進む中、長いものでは5年もの期間、その工事の責任者を務め抜くのが現場代理人です。現地に原則常駐するため、お客様にとっ

ては「最も身近な明電舎の窓口」。ふとした相談から困りごとまで、コミュニケーションした内容を社内に情報伝達し、解決への提案につなげていく先駆の役割も担います。

先進的なツールの導入や 女性の活躍推進 現場の人手不足も解消へ

2025年に創設80周年を迎えるプラント建設本部。更なる飛躍を目指すうえで、プラント建設業界を取り巻く技術者の高齢化や人手不足は大きな課題です。こうした点を受け、現場ではICTやDXを取り入れ、

業務改善や人の関与を減らすことでヒューマンエラーを防止するなど効率化を図り、遠隔操作ロボットをはじめとした新たなツールの導入にも積極的です。昔ながらの働き方にこだわる作業員も少なくありませんが、入構者管理のデータ化・工事情報一元化の推進など、ここ数年で定着したものも増えてきました。
これまでなかった専用の更衣室やトイレ、ロッカーを整えるなど、女性が働きやすい職場環境づくりも進んでいます。工業高校出身の佐藤さんは就職活動時、担任の勧めで明電舎を知り、監督の立場である現場代理人の仕事に興味を持ちました。

佐藤▶「力仕事はほとんどなく、どちらかといえばコミュニケーション力や現場の細かい部分まで行き届く観察力が求められる。男性のイメージを持たれがちな業界だが、女性がかつと進出できるよう頑張りたい。」
自身を含め4人の女性が現場で活躍していますが、今後少しでも増えることを期待しています。
佐藤▶「先人たちが積み上げてきた実績と信頼を大事に後輩たちへとつないでいく。」

次の100周年、200周年に向け、明電舎の製品に命を吹き込むプラント建設本部の挑戦は続きます。

